

## 古代インドの女性観（1）

原 實

近時、性差別批判の立場から女性史、女性観の問題が国の内外で論じられる様になったが、インド古典学の立場からこの問題を論じたらどの様になるであろうか。しばしば学者が指摘する様に、マヌ法典には所謂女性の三従が説かれ、<sup>1</sup> 仏典にも五障三従、変成男子の概念がみえ、又社会学者の注目する寡婦焚死の習俗も近年まで行われている。又文献によっては女子として誕生する事自体既に前世の悪業の結果であるとさえ言われる。<sup>2</sup> これらによって見る限り、インドには古来男尊女卑の伝統が連綿として受け継がれている様であるが、果たして事実はその通りであろうか。<sup>3</sup> 又若しそれが事実であったとしたら、インドの男尊女卑は如何なる構造を有していたであろうか。これら諸点を解明すべく我々はここに新規のプロジェクトを企画した。

併し、この問題の解明には歴史学、社会学、民族学等の視点からそれぞれに様々な方法論が立てられる。筆者の場合、その専攻分野の性格から古典インド文献学の方法に拠らざるを得ず、従って以下に論ずるところは文献に即して資料を蒐集し、それらを整理検討するに在る。

但し、このように方法論を限定しても尚問題は複雑である。何故なら、古典インドは宗教、哲学、文学、法制、医学その他、文化の諸分野に長期にわたって膨大な文献を擁し、絢爛たる文化を形成したから、それらの総てを網羅することはもとより不可能である故である。又一口に宗教といってもインドの場合、バラモン教あり、ヒンズウ教あり、仏教あり、ジャイ

<sup>1</sup> *pitā rakṣati kaumāre bhartā rakṣati yauvane  
rakṣanti sthavire putrā na strī svātantryam arhati (MS.9.3)*

For this verse, cf. Thieme 438.

<sup>2</sup> Leslie 246

<sup>3</sup> インドの場合概して「不貞」「裏切り」の咎は、大方の予想に反して妻よりも寧ろ夫の側に語られる。Cf. Thieme 466-471, esp. 471 note 2.

ナ教あり、その各々を取ってもそれぞれ膨大な文献と研究史を記録しているから、その一つを究めることすら決して容易でない。以下に論ずる所は主としてヒンズウ教の文献を中心としてそこに言及された女性観の一端に触れるものに過ぎない。

斯く限定に限定を加えても、尚事情は簡単でない。一口に女性観といっても、視点の相違によってその扱い方が様々となり、性善説の立場に立つか、性悪説の立場に立つかによって女性観は異なってくる。貞女、烈女、良妻賢母の類は前者に属し、悪女、姦婦、淫女の類は後者に属するから、それら総てを一律に論ずることは出来ない。のみならず、「女性の本性」(*stri-svabhāva*)を説く文脈と、「女性の務め」(*stri-dharma*)を説く文脈とでは、自ずからその趣を異にする。<sup>4</sup> 共に男性の立場から前者は女性の邪悪、淫蕩、不貞を嘆き、後者は規範的に女性の理想像を描く。又同じ男性の立場から見ても、女性を妻としてではなく母と見る場合には、その趣を変えて来る道理である。法典には母は父より貴い事千倍と称せられ、<sup>5</sup> 叙事詩にも母に等しき尊者なしと繰り返される。<sup>6</sup> 更に一方で、女性は諸悪の根源、<sup>7</sup> 女性より悪しきもの他に存在せず<sup>8</sup>とも語りながら、<sup>9</sup> 他方で、

<sup>4</sup> Cf. Leslie 262-263.

<sup>5</sup> *sahasraṃ tu pitṛn mātā gauraveṇātiricyate* (MS.2.145cd), *ebhyo mātā gariyasi* (YS.1.35d).

<sup>6</sup> *nāsti mātṛ-samo guruḥ* (MBh.12.109.16d, 329.11b, 13.61.89b, 108.15b, 109.62b). Cf. Kane 2.580.

<sup>7</sup> *striyo hi mūlaṃ doṣāṇām* (MBh.13.38.1c, 12c)

<sup>8</sup> *na sribhyaḥ kiṃcid anyad vai pāpiyastaram asti vai* (MBh.13.38.12ab)

<sup>9</sup> Leslie 262.

妻あって初めて家庭ありと妻を讃え、<sup>10</sup> 男女平等の思想も随所に見え、<sup>11</sup> 更にBetter-halfの概念もインドに異質でない。<sup>12</sup> 併し、概して女性一般に自立（*svātantrya*）が認められなかったことは、特にインドの場合顕著であったものの如くである。<sup>13</sup>

- <sup>10</sup> *na grhaṃ grhaṃ ity āhur grhiṇī grhaṃ ucyate*  
*grhaṃ tu grhiṇī-hinaṃ kāntārād atiricyate* (IS.3220)  
*vrkṣa-mūle 'pi dayitā yatra tiṣṭhati tad grhaṃ*  
*prāsādo 'pi tayā hino araṇya-saḍṛśaḥ smṛtaḥ* (IS.6247=*Pañcatantra* 4.81-2)

家屋は家庭に非ず、家内こそ家庭、家内なき家屋は荒野と選ぶ所なし。  
 樹下とても妻ある所、そは家庭、高楼とても妻なき所、そは森の如し。  
 (Cf. IS.4571、4576 and Winternitz 16)

- <sup>11</sup> 例えば、MS.3.55-62.

*yatra nāryas tu pūjyante ramante tatra devatāḥ*  
*yatraitās tu na pūjyante sarvās tatrāphalāḥ kriyāḥ* (MS.3.56)  
 女性達が敬われる所、神々は喜ぶ。彼女達が敬われぬ所、一切の営みは空し。

*anyonyasyāvvyabhicāro bhaved āmaraṇāntikaḥ*  
*eṣa dharmāḥ samāsenā jñeyāḥ stri-puṃsayoḥ paraḥ* (MS.9.101)  
 死に到る迄、互に裏切るべからず。詰まる所、これ夫婦の最高の勤めと知るべし。Cf. Thieme 476.

- <sup>12</sup> *ardhaṃ bhāryā manuṣyasya bhāryā śreṣṭhatamaḥ sakhā*  
*bhāryā mūlaṃ trivargasya bhāryā mitraṃ mariṣyataḥ*  
 (MBh.1.68.40=IS.623. Cf. Winternitz 17.)  
*mama cārdhaṃ śarīrasya mama cārdhād viniḥsṛtā*  
*sura-kārya-kari ca tvaṃ loka-saṃtāna-kāriṇī* (MBh.13.134.9.) Cf. Leslie 30.

*mā svayaṃ manyum utpādyā parihāse viśeṣataḥ*  
*śarīrārdhena me pūrvam ābaddhā hi yadā tvayā* (Pratimānāṭaka 1.10)  
 尚、元来不完全であった（*asarva*）男子が妻子によって完全となる思想については、Bosch 72 (MS.9.45 etc.), Kane 2 428 and Leslie 32.

- <sup>13</sup> *svātantryād vipraṇaśyanti kule jātā api striyaḥ*  
*asvātantryam atas tāsāṃ prajāpatir akalpayat* (NS.13.30)  
 自立より良家の子女とても身を滅ぼす。されば造物主は彼女達に自立すべからずと掟め給えり。

これら諸相を筆者は今後機会を見て順次紹介検討する予定であるが、ここでは先ず貞女を取り上げることとした。但し以下に論ずる所は専門研究者にとっては寧ろ最低の常識に属するから、筆者は本稿に於いて特に新説を意図する者ではない。インド古典文献学は泰西において過去200年以上の伝統を有し、それらを整理して紹介するだけでも決して容易でない故である。従って本稿の各章各節は将来より有能な研究者によって拡大、充実される事を予想し、謂わば本邦における今後の研究の Index 式出発点の性格を有している。

古来インドで貞女は一般に *sādhvī*、*pati-vratā*、*sati* と称せられ、*pati-vratā* の中には通常 *Ahalyā*、*Draupadī*、*Sitā*、*Tārā*、*Mandodari* の五人が数えられる。これら五人の貞女 *pati-vratā* は、互いに性格を異にしているが、何れも受動的に只管夫に献身奉仕<sup>14</sup>するをその共通項とし、時に夫が残忍に振る舞っても只管耐え忍ぶを旨としている。<sup>15</sup> 彼女達は夫への恭順、奉仕を唯一の徳としていたのである。<sup>16</sup>

以下に我々は貞女の生活信条としての貞節と、その間に培われる貞節力がインドの場合如何なる構造を有していたかを、文献の証拠に基づいて検討して行くであろう。

<sup>14</sup> Cf. Mallison 25-29 and Leslie 293. 夫火葬の薪に昇って敢然寡婦焚死を遂げる貞女は、戦場に名誉の戦死を遂げる兵士に擬えられ、烈女 (*śūri*) と称せられた。

<sup>15</sup> *vrataṃ carati yā nityaṃ duścaraṃ laghu-sattvayā  
pati-cittā pati-hitā sā pati-vrata-bhāgini* (MBh.13.134.49)

<sup>16</sup> 夫を死神 Yama の許より奪回し、しばしばインド女性の理想像として描かれる *Sāvitri* はこの伝統的貞女のリストの中に入らないが、それは彼女が一般の貞女と異なっていて極めて積極的個性の持ち主であった事に由来している (Cf. Aklujkar)。のみならず、その行動を仔細に検討してみると、彼女はしばしばインドの貞女の規則、定義に悖っている (Leslie 313-4)。

## 1. 貞節（尊敬と奉仕）

## (1-1) 尊敬

(1-1-1) 夫＝神<sup>17</sup>

貞女の忍従奉仕の構図は先ず夫を神 (*deva*、*daivata*、*devatā*) と崇める思想に最も端的に現れている。女性はしばしば奴婢 (*Śūdra*) と同列に置かれ、独立の人格として扱われる事がなかった。<sup>18</sup> *Śūdra* と貞女は服従を両者の共通の属性としていた故である。<sup>19</sup>

*viśilah kāma-vṛtto vā guṇair vā parivarjitaḥ*

*upacaryaḥ striyā sādhyā satataṁ devavat patiḥ* (MS.5.154)

仮令夫が行状悪く、勝手気儘に振る舞い、諸徳に欠けていても、貞女たる者は常に彼に神の如く奉仕せねばならぬ。<sup>20</sup>

*paruṣāṇy api coktā yā dr̥ṣṭā vā krūra-cakṣuṣā*

*suprasanna-mukhī bhartur yā nārī sā pativratā* (MBh.13.134.38)

口汚く罵られ、意地悪い眼で睨まれても、明るい顔で接する女子、斯かる女こそまさに貞女なり。<sup>21</sup>

二人の貞女 *Anasūyā* と *Sitā* の会話において、前者は後者の徳を讃えて次の如く言う。

*nagarastho vanastho vā pāpo vā yad cāsubhaḥ*

<sup>17</sup> Cf. Kane 2.562-3 and Leslie 63 and 281-282.

<sup>18</sup> Cf. Kane 2.594, Mallison 29-30. Cf. also MS.11.223cd (*stri-śūdra-patitāmś caiva nābhibhāṣeta karhicit*) and PS.1.13 (*stri-śūdraṁ nābhibhāṣet*)

<sup>19</sup> Cf. Leslie 309.

<sup>20</sup> *duṣṭe 'pi patyau sādhyā nānyathā-vṛtti mānasam* (KSS.77.39cd).

<sup>21</sup> *bhavanty avyabhicāriṇyo bhartur iṣṭe pativratāḥ*  
(*Kumārasambhava* 6.86cd)

*yāsāṃ striṇāṃ priyo bhartā tāsāṃ lokā mahodayāḥ* (23)  
*duḥśīlaḥ kāma-vṛtto vā dhanair vā parivarjitaḥ*  
*striṇāṃ ārya-svabhāvānāṃ paramaṃ daivataṃ patiḥ* (R.2.109.24)  
 都に在ろうと、森に在ろうと、罪を犯そうと、貧しかろうと夫を愛する女には芽出度き世界が（約束されて）ある。  
 性悪しく、勝手気侭、将又貧乏でも、夫は本性高貴な女にとり至上の神。<sup>22</sup>

(1-1-2) 夫=guru.

<sup>22</sup> Cf.

*kṣantum arhasi me vipra bhartā me daivataṃ mahat*  
*sa cāpi kṣudhitaḥ śrāntaḥ prāptaḥ śuśrūṣito mayā* (MBh.3.197.20)  
*daivateṣu api sarveṣu bhartā me daivataṃ param* (MBh.3.197.29ab)  
*tāṃ tathā rudatiṃ rāmo rudan vacanam abravīt*  
*jīwantyā hi striyā bhartā daivataṃ prabhur eva ca*  
*bhavatyā mama caivādya rājā prabhavati prabhuḥ* (R.2.21.17)  
*sā bhaved dharma-paramā sā bhaved dharma-bhāgini*  
*devavat satataṃ sādhu yā bhartāraṃ prapaśyati* (34)  
*śuśrūṣāṃ paricāraṃ ca devavad yā karoti ca*  
*nānya-bhāvā hy avimanāḥ suvratā sukha-darśanā* (MBh.13.134.35)  
*patir hi devo nāriṇāṃ patir bandhuḥ patir gatiḥ*  
*patyā samā gatiḥ nāsti daivataṃ vā yathā patiḥ* (MBh.13.134.51)  
*satyaṃ ratiś ca dharmaś ca svargaś ca guṇa-nirjitaḥ*  
*striṇāṃ pati-samādhinaṃ kāṅkṣitaṃ ca dvijottama* (24)  
*ṛtur mātuh pitur bījaṃ daivataṃ paramaṃ patiḥ*  
*bhartuh prasādāt striṇāṃ vai ratiḥ putra-phalaṃ tathā* (MBh.14.93.25)  
*mitaṃ dadāti hi pitā mitaṃ bhrātā mitaṃ sutaḥ*  
*amitasya hi dātāraṃ bhartāraṃ kā na pūjayet* (6)  
*nāsti bhartr-samo nātho na ca bhartr-samaṃ sukham*  
*visrjya dhana-sarvasvaṃ bhartā vai śaraṇaṃ striyāḥ* (7)  
*na kāryam iha me nātha jīvitena tvayā vinā*  
*pati-hīnāpi kā nārī sati jīvitum utsahet* (MBh.12.144.8)  
*kaccid cākhila-devebhyo manyase 'bhyadhikaṃ patim* (MP.16.54cd)  
*nārī sukham avāpnoti nāryā bhartā hi devatā* (MP.16.67cd)

夫は妻にとり最も尊敬すべき長上 (*guru*) として仰がれる。この語は通常「師」と訳される<sup>23</sup>ので、上の奴婢 (*śūdra*) の場合と同じ様に、妻の夫奉仕 (*pati-śuśrūṣā*) は弟子の師への恭順 (*guru-śuśrūṣā*、*-śuśrūṣaṇa*) に比較される。<sup>24</sup> 更に又上層三階級の男子は師家入門を *upanayana* と称して、重要な通過儀礼の一環となしていたが、女子の場合は「結婚」を以ってこれに替わるものとしていた。<sup>25</sup>

貞女の鑑 *Sitā* は同じく貞女 *Anasūyā* に答えて言う。

*viditaṃ tu mamāpi etad yathā nāryāḥ patir guruḥ* (2)

*yady apy eṣa bhaved bhartā mamārye vṛtta-varjitaḥ*

*advaidham upavartavyas tathāpy eṣa mayā bhavet* (*R.2.110.3*)

私も、女子にとって夫は *guru* であると承知しております。仮令品行悪くとも、只管私は彼に仕えねばなりません。

無条件、絶対服従の構図がここに示される。<sup>26</sup>

(1-1-3) 神と崇め、*guru* として尊ぶ夫の為には妻たる者、生命を擲っても尽くさねばならない。妻は夫の為とあれば己が命を顧みず夫に奉仕するを旨とし (*prāṇānām avigaṇanayā*)、夫の命令とあれば己を売り (*bhartr-kṛtātma-vikrayāṅgikāra*)、他の人間としての義務に反しても夫の言を貴しとする (*itara-dharmopamardenāpi*)。<sup>27</sup>

<sup>23</sup> Cf. Hara 1980.

<sup>24</sup> Cf. Leslie 29-30, 322-323.

<sup>25</sup> Cf. Leslie 35-38, 322

<sup>26</sup> 斯かる貞女に幸福の女神 *Śrī* は宿る。

*satyāsu nityaṃ priya-darśanāsu saubhāgya-yuktāsu guṇānvitāsu  
vasāmi nāriṣu pati-vratāsu kalyāṇa-śīlāsu vibhūṣitāsu* (*MBh.13.11.13*)

正直で、常に愛らしく、魅力あり、徳高く、親切で、身嗜みのよい貞女に私は宿る。(Cf. *MBh.13.11.10*)

<sup>27</sup> Cf. Leslie 305-312.

*etad dhi paramaṃ nāryāḥ kāryaṃ loke sanātanam  
prāṇān api parityajya yad bhartr-hitam ācaret (MBh.1.146.4)*

仮令命を捨てても、夫のためになる事を遂行するは、この世における  
女の最高、永遠の義務。<sup>28</sup>

(1-1-4) 女性は常に夫と共に在り、夫に随順するのが本来の在り方であつた。

*śaśinā saha yāti kaumudī saha meghena tadit praliyate  
pramadāḥ pati-vartma-gā iti pratipannaṃ hi vicetanair api*  
(*Kumārasambhava* 4.33)

月光は月と共に現れ、稲妻は雲と共に消え、女は夫に従い行くとは、  
心なき者もこれを知る。

ここに月光、稲妻は女性名詞、月と雲は男性名詞である。  
夫婦随伴はその神的塑型、Śiva と Pārvatī のそれに象徴されている。

*vāg-arthāu iva samprktau vāg-artha-pratipattaye  
jagataḥ pitarau vande pārvatī-parameśvarau (Raghuvamśa 1.1)*  
言葉と意味の正しき理解の為に、その融合、言葉とその意味の如き、  
世界の生みの親たる両神に我礼拝なす。

ここに言葉は女性、意味は男性名詞である。<sup>29</sup> 言葉とその意味との関係  
(*śabdārtha-sambandha*) は不可分とされ、それはしばしばインドの言語  
哲学において議論の焦点となった。

妻は *saha-dharma-cāriṇī* と称せられ、*patnī* (妻) は常に夫と共に祭式

<sup>28</sup> 夫は命より大事と言われる。*prāṇebhyo 'pi gariyān tatra bhartā mahā-balaḥ*  
(R.7.486\*4ab=24.28cd Bombay)

<sup>29</sup> Cf. Meyer 440.



を執行する者の義であった(*patyur no yajña-samyoge: Pāṇini 4.1.33.*)。<sup>30</sup>

(1-2) 奉仕 (*śuśrūṣā*)

(1-2-1) 男性には神事祭式の執行、苦行、誓戒、断食の実践等、功德を積んで死後天界に生まれる手立てが複数存在していたが、女性には夫への恭順奉仕以外に彼女自身による積善の道は存在しなかった。<sup>31</sup>

(1-2-1-1) 先ずマヌ法典には次の如く規定されている。

*nāsti striṇām prthag yajño na vratam nāpy upoṣaṇam  
patim śuśrūṣate yena tena svarge mahīyate (MS.5.155)*

妻に単独の供犠はない。誓戒も断食もない。夫に仕える事によって（のみ、死後）天界において貴ばれる。

同様に、叙事詩に言われる。

*yajñais tapobhir niyamair dānaiś ca vividhais tathā  
viśiṣyate striyā bhartur nityam priya-hite sthitiḥ (MBh.1.146.24)*

女にとって、常に夫が喜び、彼の為になる事に専念するのは、各種の供犠、苦行、誓戒、布施よりも優れる。

(1-2-1-2) 貞女 Anasūyā の婦女庭訓に言う。

*striyas tu evaṃ samastasya narair duḥkhārjitasya vai  
puṇyasyārdhāpahārinyah pati-śuśrūṣayaiva hi (60)  
nāsti striṇām prthag-yajño na śrāddham nāpy upoṣitam  
bhartr-śuśrūṣayaivaitān lokān iṣṭān vrajanti hi (61)  
yad devebhyo yac ca pitrāgatebhyah*

<sup>30</sup> Cf. Kane 2.558.

<sup>31</sup> Cf. Mallison 31 and 42-3 note 4. Cf. also,

*bhāryaikā pati-bhāgyāni bhuṅkte pati-parāyaṇā (IS.1026ef)*

*bhartur bhāgyam tu nāry ekā prāpnoti puruṣarṣabha (IS.1027ef)*

*kuryād bhartābhyarcanam satkriyātaḥ*  
*tasyāpy ardham kevalānanya-cittā*  
*nārī bhunkte bhartṛ-śuśrūṣayaiva (63)*  
*pati-prasādād iha ca pretya caiva yaśasvini*  
*nārī sukhām avāpnoti nāryā bhartā hi devatā (MP.16.67)*

女は夫がこの様に苦勞して得た功德の半分に、夫への奉仕によってのみあやかる事が出来るのです。

女だけに特別の供犠、祖先祭、斷食というものはありません。夫への奉仕によってのみ（死後）望ましい世界に行くことが出来るのです。夫が恭順の心を籠めて為す、神々、先祖、客人への供養の（功德の）半分に、夫を只管思う女が、夫奉仕によってのみ、あやかる事が出来るのです。

夫を喜ばす事によって女はこの世でもあの世でも幸せになれるのです。蓋し夫は女にとり神様ですから。

(1-2-1-3) 夫への奉仕は、その足を洗う事に象徴されている。

*na dānaiḥ śudhyate nārī nopavāsa-śatair api*  
*na tirtha-sevayā tadvad bhartuḥ pādodakair yathā*  
*(IS.3286=／=3285)*

幾百の布施、斷食、聖地巡礼によるも、女子は清められず、夫の足を洗う水による程には。<sup>32</sup>

のみならず、夫が足を洗った水を飲む事は、聖地における沐浴に等しいと言われる。<sup>33</sup>

(1-2-2) 女性の場合、所謂 *tapas* は夫奉仕によってのみ得られた。後述する如く貞女 *Gāndhārī* は *Kṛṣṇa* を呪うが、それに先立って次の様に言う。

<sup>32</sup> Cf. Winternitz 36.

<sup>33</sup> Cf. Leslie 280.

*pati-śuśrūṣayā yan me tapaḥ kaścid upārjitam*  
*tena tvāṃ duravāptātman śapsye cakragadādhara* (MBh.11.25.39)  
 若し夫奉仕により、我に幾許かタパスあれば、それにて我は汝を呪わ  
 ん。<sup>34</sup>

二人の貞女 Arundhatī と Sitā の対話の中で、Sitā は次の如く言う。

*pati-śuśrūṣaṇān nāryās tapo nānyad vidhiyate* (9)  
*sāvitri pati-śuśrūṣāṃ kṛtvā svarge mahīyate*  
*tathā-vṛttiś ca yātā tvāṃ pati-śuśrūṣayā divam* (R.2.110.10)  
 女にとって夫奉仕以外に他のタパスは定められていません。Sāvitri  
 は夫奉仕を為して天界で尊ばれました。同じ生活信条で貴方も夫奉仕  
 により天界に赴きました。

天界に到達した Śaṇḍili を迎えて Kekaya Sumanā は次のように言う。<sup>35</sup>

*kena vṛttena kalyāṇi samācāreṇa kena vā*  
*vidhūya sarva-pāpāni devalokaṃ tvam āgatā* (3)  
*hutāśana-śikheva tvāṃ jvalamānā svatejasā*  
*sutā tārādhipasyeva prabhayā divam āgatā* (4)  
*arajāṃsi ca vastrāṇi dhārayanti gata-klamā*  
*vimānasthā śubhe bhāsi sahasra-guṇam ojasā* (5)

<sup>34</sup> Cf.

*aprāpya caiva taṃ kāmāṃ maithili-saṃgame kṛtam*  
*pativratāyās tapasā nūnaṃ dagdho 'si me prabho* (R.6.3116\*4-5 =  
 Bombay 6.111.23)  
*pativratā dharma-parā guru-śuśrūṣaṇe ratāḥ*  
*tābhiḥ śokābhitaptābhiḥ śaptaḥ para-vaśaṃ gataḥ*  
 (R.6.App.68.63-4 = Bombay 6.111.65)

<sup>35</sup> Cf. Kane 2.567, Meyer 427-429, Leslie 282.

*na tvam alpena tapasā dānena niyamena va  
imam lokam anuprāptā tasmāt tattvaṃ vadasva me* (6)

如何なる行いにより、又如何なる善業により、貴女は一切の穢れを払って天界に来られたのですか。

御自身の威光により焰の如く輝き、星宿の王（月）の娘のように光り輝きながら、貴女は天界に来られました。

塵を寄せ付けない衣を纏い<sup>36</sup>、疲労を知らず、天車に乗れば又精気千倍に輝いておいでです。

僅かなタパス、布施、戒行（の功德）でこの世界に来られる筈がありません。ですから真実の事を話して下さい。

Śaṇḍili は答えて次の様に言った。

*nāham kāṣāya-vasanā nāpi valkala-dhāriṇī  
na ca muṇḍā na jaṭilā bhūtvā devatvam āgatā* (8)  
*ahitāni ca vākyaṇi sarvāṇi paruṣāṇi ca  
apramattā ca bhartāraṃ kadācin nāham abruvam* (9)  
*devatānāṃ pitṛiṇāṃ ca brāhmaṇānāṃ ca pūjane  
apramattā sadāyuktā śvaśrū-śvaśura-vartini* (MBh.13.124.10)

私は袈裟を着、樹皮を纏い、剃髪、結髪して天界に来たわけではありません。

夫に対し、為にならない言葉や、粗暴な言辞を吐かぬよう、常に心掛けておりました。

常に努めて神様、御先祖様、バラモン達を供養する事を心掛け、舅、姑に心を籠めて仕えておりました。

更に彼女は夫より朝は早く起きて家事を整え、<sup>37</sup> 家の掃除その他貞女の

<sup>36</sup> 携帯品、着用品に塵を寄せ付けないのは、神の徴標の一つとされる。Cf. Hopkins 1915 57-58 (The signs of the Gods).

<sup>37</sup> Cf. Leslie 52, 65.

日常に触れ、夫不在中の心得等、夫奉仕を具体的に物語る(11-19)。ここに袈裟、樹皮、剃髪、結髪は通常苦行者の徴標とされるから、<sup>38</sup> 女性にとって夫への恭順が苦行より大切であった事が説かれている。

(1-2-3) 夫への絶対服従の構図は、その命令とあれば夫以外の男性にさえその身を委ねる事に究極する。<sup>39</sup> その最も顕著な例は在家 (*grhastha*) の身で死 (*mṛtyu*) を克服せん (*grhasthaś cāvajeṣyāmi mṛtyum*) との誓 (*pratijñā*) を立て、日頃から妻 Oghavatī に己を与えても (*apy ātmanah pradānena*) 客人に歓待の誠を (*atithi-pūjā*) 尽くすべしと説いていた Sudarśana の物語に見られる。一日、夫の留守中一人のバラモンが現れて客人歓待を乞い、彼女の肉体を求める。彼女は夫の日頃の言い付けを守って彼に身を委ねた。帰宅した彼はそれを知っても喜怒哀楽の情を抑えて、彼女の所行を讃えた。バラモンはその正体を顕し Dharma となって (*dharmo 'ham asmi bhadram te jijñāsārthaṃ tavānagha: 78ab*)、彼の所行を讃えたと伝えられる。その関連章句を引用すれば以下の通りである。

*yadi pramāṇaṃ dharmas te grhasthāśrama-sammataḥ  
pradānenātmano rājñi kartum arhasi me priyam (53)*

若し汝が家長期の義務を貴しとなすのであれば、己を与える事によって、余を楽しませろ。

*sā tu rāja-sutā smṛtvā bhartur vacanam āditaḥ  
tatheti lajjamānā sā tam uvāca dvijaṛṣabham (55)*

彼女は夫の言を想起して、恥しそうにこのバラモンに「宜しうございます」と答えた。

*sudarśanas tu manasā karmaṇā cakṣuṣā girā  
tyaktersyas tyakta-manyuś ca smayamāno 'bravid idam (67)  
surataṃ te 'stu viprāgrya prītir hi paramā mama*

<sup>38</sup> Cf. Leslie 282.

<sup>39</sup> Cf. Leslie 311, 324.

*gr̥hasthasya hi dharmo 'gryaḥ samprāptātithi-pūjanam*  
(MBh, 13.2. 68)

Sudarśana は心でも、行いでも、眼つきでも、言葉でも、嫉妬と憤懣を抑えて微笑みながら言った。どうぞお愉しみ下さい。私は心から満足しております。在家者の最高の義務は蓋し客人歓待に究極しますから。

(1-2-3) 夫奉仕はもとより女子の結婚を前提としているから、従って結婚しない女子に天界の門は閉ざされていた。有名な Kuṇi Gārgya 意生の美娘は意に適う男性を得ぬまま激しい苦行に身を委ね、晩年痩せ細って他界を決意したが、彼女は未婚の故に天国に入る事を許されなかった。<sup>40</sup>

*sā nāśakad yadā gantum padāt padam api svayam*  
*cakāra gamane buddhiṃ para-lokāya vai tadā (10)*  
*moktu-kāmāṃ tu tāṃ dṛṣtvā śariraṃ nārado 'bravit*  
*asaṃskṛtāyāḥ kanyāyāḥ kuto lokās tavānaghe (MBh.9.51.11)*

最早一步も歩けなくなった時、彼女は他界を決意した。肉体を捨てようとしている彼女を見て Nārada は言った。(結婚して) 清められていない処女にどうして天界など有り得ようか。

彼女は自分と結婚してくれる者あれば、己がタパスの半分を与えとの条件で相手を募り、首尾よく聖仙 Prākṣṛṅgavat と一夜を共にする事を得た。斯くして彼女は初めて天界を得たと伝えられる。尚女性浄化としての結婚については稿を改める。

### (1-3) 女性のタパス

上に我々は、女子には夫への恭順奉仕以外に独自に苦行、戒行をなして自ら功德を積む事はないと言われているのを見たが、時にそれに矛盾する

<sup>40</sup> Cf. Meyer 155, Bosch 79 note 45.

かと思われる章句も散見する。<sup>41</sup>

(1-3-1) その最も顕著な例は Draupadi のタパスとして言及されるもので、彼女のタパスは夫達に勝利を齎したと言われる。<sup>42</sup> 戦いに敗れた Duryodhana は、瀕死の重傷の床に在って過去を想起して言う。

*yadā ca draupadi kṛṣṇā mad-vināsāya duḥkhitā  
ugraṃ tepe tapaḥ kṛṣṇā bhartr̥ṇām artha-siddhaye  
sthaṇḍile nityadā śete yāvad vairasya yātanā (MBh.9.4.18)*

苦悩を受けた黒肌の Draupadi は、夫達の大願成就のため余を滅ぼさんと激しい苦行に身を委ねた。その恨みを晴らすまで彼女は常に露地に臥していた。

同様に戦勝に酔う Bhīmasena は豪語して言う。

*rajasvalāṃ draupadīm ānayan ye  
ye cāpy akurvanta sadasy avastrām  
tān paśyadhvaṃ pāṇḍavair dhārtarāṣṭrān  
raṇe hatāṃs tapasā yājñasenyāḥ (MBh.9.58.10)*

月経中の Draupadi を連れ出して満座の中で彼女を裸にした Dhṛtarāṣṭra の一族郎党が、Pāṇḍu の子等の手に掛かって最期を遂げたのも、所詮は Draupadi のタパスの致す所と、汝等知るべし。

但し、この場合女性のタパスは忍耐に彩られ、<sup>43</sup> それは怨恨の形を取っている。

(1-3-1-2) Sitāの前身 Vedavati は父なる聖仙 Kuśadhvaja の意を体して只管 Nārāyaṇa を夫に持つ事を心に念じて苦行に身を委ねていたが、或

<sup>41</sup> Cf. Kantawala 1964 98.

<sup>42</sup> Cf. Hildebeitel 190.

<sup>43</sup> Cf. Hara 1977-78.

る時 Rāvaṇa に言い寄られ強引にその髪を掴まれた。<sup>44</sup> その手を振り払って彼女は彼を呪う。<sup>45</sup>

*yasmāt tu dharṣitā cāham apāpā cāpy anāthavat  
tasmāt tava vadhārthaṃ vai samutpatsyāmy ahaṃ punaḥ (25)  
na hi śakyaḥ striyā pāpa hantum tvaṃ tu viśeṣataḥ  
śāpe tvayi mayotsrṣṭe tapasaś ca vyayo bhavet (26)  
yadi tv asti mayā kiṃ cit kṛtaṃ dattaṃ hutam tathā  
tena hy ayonijā sādhuḥ bhaveyaṃ dharmiṇaḥ sutā (R.7.17.27)*

我は罪もなく、頼りもなき身でありながら汝の犯す所となれば、汝を殺さんため（来世に再び）生れ変らん。悪しき者よ、されど汝は就中、女によっては殺され得ぬ。将又汝をここに呪わば我はタパスを消費することとならん。<sup>46</sup> されど若し我に善業、布施、祭式の功德あれば、それにて我は母の胎より生まれる事なく、行い正しき者の娘として再生せんことを。

斯く言って入火自殺を遂げるが、果たして彼女はこの誓通り次世に「哇より生まれた Sitā」となって、名君 Janaka 王の養女となったのである。

(1-3-2) 貞女のタパスは又彼女達に vara 賦与を可能ならしめた。<sup>47</sup> 貞女の誉れ高い Atri の妻 Anasūyā は Sitā の言葉に満足して彼女に vara を選ばせる。

*niyamair vividhair āptaṃ tapo hi mahad asti me  
tat saṃśritya balaṃ site chandase tvāṃ śuci-vrate (R.2.110.14)*  
私は各種誓戒により大きなタパスを持っています。その力に拠って私

<sup>44</sup> Cf. Hara 1986.

<sup>45</sup> Cf. Meyer 23-25.

<sup>46</sup> Cf. Hara 1997 233.

<sup>47</sup> Cf. Hara 1997 235-237.



は貴女をお喜ばせ致しましょう。

これに対して Sītā は Anasūyā が満足していればそれ以上何も望むものはないと答えたから、Anasūyā は更に感心して彼女に諸々の贈物を与えた。その中の神秘的化粧品 (aṅga-rāga: R.2.110.17c)<sup>48</sup> は又 Raghuvamśa 12.27、14.14にも言及される。<sup>49</sup>

(1-3-3) この他にも Anasūyā の神通力は各種の奇蹟を成就した。

*daśa varṣa-sahasrāṇi yayā taptam mahat tapaḥ  
anasūyā-vratais tāta pratyūhās ca nirbarhitāḥ* (R.2.109.11)

彼女は一万年間大なるタパスを修した。各種 Anasūyā 誓戒により諸々の障害は除去された。

後述する Mārkaṇḍeya Purāṇa 16の物語の他、彼女はそのタパスにより、七人の仙人が沐浴出来る様にガンジス川をその庵に導いたと言われる。<sup>50</sup>

## 2. 貞操力

本邦の壺坂靈騷記に見える貞女お里は、盲目の夫沢市の生命を救ってその開眼を齎し、又 R.Wagner の楽劇 Tannhäuser の貞女 Elizabeth の献

<sup>48</sup> *idaṃ divyaṃ varaṃ mālyaṃ vastram ābharaṇāni ca  
aṅga-rāgaṃ ca vaidehi mahārham anulepanam* (R.2.110.17)

<sup>49</sup> *anasūyātisṛṣṭena puṇya-gandhena kānanam  
sā cakārāṅgarāgeṇa puṣpoccalita-ṣaṭpadam* (Raghuvamśa 12.27)  
*sphurat-prabhā-maṇḍalam ānusūyaṃ sā bibhrati sāsvatam aṅgarāgam  
rarāja śuddheti punaḥ svapuryai saṃdarśitā vahni-gateva bhartrā*  
(Raghuvamśa 14.14)

<sup>50</sup> *atrābhiṣekāya tapodhanānām saptarṣi-hastoddhṛta-hema-padmām  
pravartayām āsa kilānasūyā trisrotasaṃ tryambaka-mauli-mālām*  
(Raghuvamśa 13.51)

身は、教皇の杖に緑の枝を生ずる奇蹟を現じたが、インドに在っても貞女の献身は様々な奇蹟を齎した。その最も典型的なるものは、Mārkaṇḍeya Purāṇa 第16章に語られる癩病の夫の命を救うため日の出を阻止した貞女物語であるが、<sup>51</sup> これらの奇蹟を可能ならしめるものは貞操の徳にひそむ神秘力に他ならなかった。

然らばそれらはどのような現象形態を取ったか、以下にそれらを文献の用例に従って分類整理して行くであろう。

(2-1) 先ず第一にその神秘力は貞女自身を守護するに資した。

*samudrāvaraṇā bhūmiḥ prākārāvaraṇaṃ grham  
narendrāvaraṇa deśās caritrāvaraṇāḥ striyaḥ* (IS.6862)

大地は海により、家は塀により、国は王により、婦女は貞操 (caritra) によって被護されている。

既述の Sudarśana と Oghavati の物語に於いて Dharma は言う。

*rakṣitā tvad-guṇair eṣā pati-vratā-guṇais tathā* (MBh.13.2.81ab)

汝の徳と（彼女の）貞節の徳により、この女は護られてあり。

後述する貞女 Damayanti を守ったものも「貞女の威光」(sati-tejas) に他ならなかった。

*sati-tejaś ca mārge tām arakṣad vane lubdhakaḥ  
bhasmī-kṛto 'hes trātāyāṃ tasyāṃ gata-manāḥ kṣaṇāt*  
(KSS.56.326)

道中、彼女を守ったのは貞女の威光であった。と言うのも森の中で蛇（の恐怖）から彼女を救った獵人は、（変心して）彼女に懸想した時忽

<sup>51</sup> Cf. Winternitz 1907 472, Hazra 231.

ち灰と化した故である。

誘拐者 Rāvaṇa は Sitā を犯す事は出来なかった。彼女は自らの貞操「力」(tejas)によって護られていた故である。

*imām api viśālākṣiṃ rakṣitām svena tejasā*

*rāvaṇo nātivarteta velām iva mahodadhiḥ (R.6.106.15)*

己が（貞操）力によって護られたる、眼麗しき彼女を Rāvaṇa の犯し得ざる事、大海の渚を超える事なきが如し。

不本意にも Śakuntalā を拒絶した Duṣṣanta は後悔しつつも、彼女の安全を確信して次の如く言う。

*vayasya, kaḥ pati-vratām tām anyah parāmārṣtum utsahate*  
(Śakuntalā 6.10.4)

友よ、夫に貞節な姫に、誰が手を触れ得ようぞ（辻直四郎訳）

夫の火神 (agni) が祭式の庭に七人の仙人の妻を見て欲情を催した時、妻の Svāhā は七仙の妻の形を取って次々に火神と交わって夫を満足させたが、彼女はしかし Vasiṣṭha 仙の妻 Arundhati の形を取る事は出来なかったと言われる。それは彼女のタパスとその夫への恭順の致す所であった。<sup>52</sup>

*divya-rūpam arundhatyāḥ kartum na śakitaṃ tayā*

*tasyās tapaḥ-prabhāveṇa bharṭṛ-śuśrūṣaṇena ca (MBh.3.214.14)*

彼女は Arundhati の神々しい姿を取る事は出来なかった。彼女のタ

<sup>52</sup> Cf. Leslie 313.

パスの力により、又（夫への）恭順の故に。<sup>53</sup>

## （2-2）呪詛（1）

先に貞節献身こそ女性のタパスと言われているのを見たが、恰も苦行によってタパスを積んだ苦行者が、一旦緩急ある時呪詛を己が武器として自己の保全を謀ったように、<sup>54</sup> 貞女はその貞操を己が武器としていた。斯くして貞女は夫への奉仕によって得たタパスにより、邪念を以って近づく不逞な輩を斥ける事が出来たが、それはしばしば呪詛の形を取った。<sup>55</sup> それは又「真実語」の主題と密接に連動している。

（2-2-1）貞女 Damayantī は不埒な獵人を呪詛により殺害した。

*damayanti tu taṁ duṣṭam upalabhya pati-vratā  
tīvra-roṣa-samāviṣṭā prajajvāleva manyunā* (34)

*sa tu pāpa-matiḥ kṣudraḥ pradharṣayitum āturaḥ  
durdharṣāṁ tarkayām āsa diptām agni-śikhām iva* (35)

*damayanti tu duḥkhārtā pati-rājya-vinākrtā  
atita-vāk-pathe kāle śaśapainam ruṣā kila* (36)

*yathāhaṁ naiṣadhād anyam manasāpi na cintaye  
tathāyam patatām kṣudraḥ parāsur mṛga-jīvinah* (37)

*ukta-mātre tu vacane tayā sa mṛga-jīvanah*

*vyasuḥ papāta medinyām agni-dagdha iva drumah* (MBh.3.60.38)

貞女 Damayantī は彼の穢わしい意図を知って激しく怒り、憤慨の余り燃え上がらんばかりであった。

一方この恋に悩む小人は彼女を犯そうと邪念を抱いたが、燃え上がる

<sup>53</sup> Hanumat の誕生物語の中、風神は彼の母 Añjanā に近づくが、彼女はこの神を威嚇して次の如く言う。

*sā tu tatraiva sambhrāntā suvṛttā vākyam abravīt  
eka-patni-vratam idaṁ ko nāśayitum icchati* (R.4.65.16)

行い正しき彼女は、その場に立ち竦んで次の様に言った。何人が貞女の誓を壊さんと欲するか。

<sup>54</sup> Cf. Hara 1997.

<sup>55</sup> Cf. Smith 266 and Hopkins 1932 319-320.

焰のような彼女を（見て）犯し難いと観じた。

夫も王国も喪った彼女は、最早説得和解は不可能と観じて、怒りによって彼を呪詛した。

「私はナラ王以外の男性を心ですら考えた事がない。さればこの卑しい獵人は息絶えて倒れよ」

彼女がこの言葉を発した途端、かの獵人は火に焼かれた樹木の如く大地に倒れて息絶えた。<sup>56</sup>

(2-2-2) 数多貞女に懸想して、その夫達を殺害し、略奪を事とした Rāvaṇa は、これら貞女達の呪いによって身を滅ぼした。<sup>57</sup>

(2-2-2-1) 先ず Rāvaṇa 死して、妻 Maṇḍodarī は嘆いて言う。

*yās tvayā vidhavā rājan kṛtā naikāḥ kula-striyaḥ  
pati-vratā dharma-parā guru-śuśrūṣaṇe ratāḥ  
tābhiḥ śokābhīṣatābhiḥ śaptaḥ para-vaśaṃ gataḥ  
tvayā viprakṛtābhir yat tadā śaptaṃ tad āgatam  
(R.6.App.68.62-65=Bombay 6.111.64cd-66ab)*

王よ、貞節にして行い正しく、長上奉仕を旨とせる数多の良家の子女を貴方は寡婦たらしめた。彼女達は悲嘆に暮れて呪った結果、貴方は敵の手に落ちた。貴方に虐待された女達の呪いがここに実現してしまっ

<sup>56</sup> Cf.

*katham cic cāticakrāma nadi-śaila-vanāṭaviḥ  
nāticakrāma bhaktiṃ tu sā bhārtari katham cana (325)  
sati-tejaś ca mārge tām arakṣad vane lubdhakaḥ  
bhasmī-kṛto 'hes trātāyāṃ tasyāṃ gata-manāḥ kṣaṇāt (KSS.56.326)*

<sup>57</sup> Daśakumāracarita の最終章にも次の如き章句がある。

*aho mātmyam pativratānām.... /yo 'syāḥ pativratāyāḥ śāsanam  
ativartate sa bhasmaiva bhavet (Daśakumāracarita 274.1-5)*  
おお、貞女の威力大なり。かの貞女の命令を冒す者は灰と化さん。

Cf. also

*sa evāyam asi-prahāraḥ pāpiyasas tava bhavatu, yady asmi pativratā  
(Daśakumāracarita 273.2-3). Lüders 501.*

たのです。<sup>58</sup>

(2-2-2-2) 同様な場面が最終巻に語られる。

*yasmād eṣa parakyāsu striṣu rajyati durmatih*  
*tasmād dhi stri-kṛtenaiva vadhaṃ prāpsyati rāvaṇaḥ* (15)  
*śaptaḥ strībhiḥ sa tu tadā hata-tejāḥ suniṣprabhaḥ*  
*pativratābhiḥ sādhuībhiḥ sthitābhiḥ sādhu-vartmani* (R.7.24.16)  
 「愚かにも他人の妻に懸想なせば、これなる Rāvaṇa は将来女の手に  
 掛かって命落とさん」と行い正しき貞女達に呪われて、その時彼は氣  
 力失せ、輝きを失った。<sup>59</sup>

(2-3) 呪詛 (2)

自己防衛のみならず、貞女は不正不義に怒れば、呪詛によってその犯人  
 を焼き殺す事が可能であった。

(2-3-1) 武士道に悖る仕方で従兄弟 Duryodhana を討ち取った Pāṇḍava  
 の長兄 Yudhiṣṭhira は伯母 Gāndhārī の仕返しを怖れる。

*cintayāno mahābhāgāṃ gāndhārīm tapasānvitām*  
*ghoreṇa tapasā yuktām trailokyam api sā dahet* (10)  
*tasya cintayamānasya buddhiḥ samabhavat tadā*

<sup>58</sup> Cf.

*pativratāyās tapasā nūnaṃ dagdho 'si me prabho* (R.6.111.23cd Bom-  
 bay)

<sup>59</sup> 尚、Sītā の呪い (*satto si*) を蒙った Rāvaṇa は豪語嘲笑なして次の様にも言  
 う。

*hahaha, aho pativratāyās tejaḥ*  
*yo 'ham utpatito vegān na dagdhaḥ sūrya-raśmibhiḥ*  
*asyāḥ parimitair dagdhaḥ śapto 'sity ebhir akṣaraiḥ*  
 (Pratimānāṭaka 5.20)  
*devāḥ sendrādayo bhagnā dānavās ca mayā raṇe*  
*so 'haṃ mohaṃ gato 'smy adya sītāyās tribhir akṣaraiḥ*  
 (Abhiṣekanāṭaka 2.18)

*gāndhāryāḥ krodha-diptayāyāḥ pūrvam praśamanam bhavet (11)*

*sā hi putra-vadham śrutvā kṛtam asmābhir idṛśam*

*mānasenāgninā kruddhā bhasmasān naḥ kariṣyati (12)*

*katham duḥkham idam tivram gāndhārī prasahiṣyati*

*śrutvā vinihatam putram chalenājihma-yodhinam (MBh.9.62.13)*

「ひょっとして彼女は三界をも焼き払うかも知れない」と、福德大にして、タパス、それも恐ろしい程のタパスを具えた Gāndhārī の事を案じていると、その時彼に一つの考えが浮かんた。「先ずは怒りに燃える Gāndhārī を宥め、（その怒りを）鎮めねばならぬ。

というのも彼女はこの様な（道ならぬ）仕方で我々がその息子を殺したと聞いたら怒り、その心の火によって我々を灰と化し兼ねない。

正攻法を旨としていた息子が姦計によって殺されたと聞いたら、如何にして Gāndhārī はその激しい苦痛に耐え得ようか」<sup>60</sup>

(2-3-2) 彼の予想通り、彼女は天眼を以って具に戦いの様子を見ていた。

*evam uktvā tu gāndhārī kurūṇām āvikartanam*

*apaśyat tatra tiṣṭhanti sarvaṁ divyena cakṣuṣā (1)*

*pativratā mahābhāgā samāna-vrata-cārīṇi*

*ugreṇa tapasā yuktā satatam satya-vādinī (2)*

*vara-dānena kṛṣṇasya maharṣeḥ puṇya-karmaṇaḥ*

*divya-jñāna-balopetā vividham paryadevayat (3)*

*dadarśa sā buddhimatī dūrād api yathāntike*

*raṇājiram nṛ-virāṇām adbhutam loma-harṣaṇam (MBh.11.16.4)*

斯く言つて Gāndhārī はその場に留まりつつも、天眼により Kuru 族の殺戮の様を具に見た。

福德大なる貞女にして全ての誓戒を實踐なし、恐ろしいタパスを具え、常に不妄語を旨となし

<sup>60</sup> *gāndhāryā hi mahābāho krodham budhyasva mādhave*  
*sā hi nityam mahābhāgā tapasogreṇa karṣitā (MBh.9.62.22)*

浄行の大仙 Kṛṣṇa より *vara* を授かり、神秘的知力を具えていた彼女は（これを見て）甚く嘆き悲しんだ。

賢い彼女は遠方なるも手近にある如く、英雄勇士達の身の毛もよだつ戦いの様を見た。

(2-3-3) 後、彼女は Kṛṣṇa と相見えて次のように呪詛を発した。

*pati-śuśrūṣayā yan me tapah kimcid upārjitam  
tena tvāṃ duravāpātmañ śapsye cakragadādhara (39)  
yasmāt parasparam ghnanto jñātayaḥ kuru-pāṇḍavāḥ  
upekṣitās te govinda tasmāj jñātin vadhiṣyasi (40)  
tvam apy upasthite varṣe ṣaṭ-triṃśe madhusūdana  
hata-jñātir hatāmātyo hata-putro vane-carah  
kutsitenābhyupāyena nidhanaṃ samavāpsyasi (MBh.11.25.41)*

夫奉仕により我に幾許かタパス獲得されておりとせば、我はそれにて汝を呪詛せん。<sup>61</sup> 汝はクルとパンダヴァの一族が互いに殺し合うのを等閑視せるにより、汝も亦将来親族を殺害せん。

今より36年後、親族、家臣、息子等殺されて森を独り彷徨う間、汝も非業の死を遂げん事必定。

果たして大戦後36年目、貞女の呪詛が実現して、一族の殲滅を見たことは叙事詩16巻に語られる通りである。<sup>62</sup>

<sup>61</sup> Cf.

*pativratā dharma-ratā guru-śuśrūṣaṇe ratāḥ  
tābhiḥ śokābhitaptābhiḥ śaptaḥ para-vaśaṃ gataḥ (65cd)  
tvayā viprakṛtābhiḥ ca tadā śaptas tad āgatam (R.6.111.66ab Bombay)*

<sup>62</sup> 一切の呪いには対処療法あるも、母の呪いに逃げ道なしと言われる。

*sarveṣāṃ eva śāpānāṃ pratighāto hi vidyate  
na tu mātṛābhiḥ śaptānāṃ mokṣaḥ vidyeta pannagāḥ  
(MBh.1.33.4=IS.6956)*



## (2-4) 報復

殺害に至らずとも、貞女に邪念を抱く者は彼女のタパスの致す所、相応の罰を受ける。Gālava と Garuḍa とは Rṣabha 山の頂にタパスを具えた (taponvītā 5.111.1) バラモン女 Śāṇḍili を見、彼女に歓待されてそこに一夜を過ごした。夜半目覚めた兩人は Garuḍa がその翼の落ちて肉塊と化したのを見て驚き且つは訝る。Gālava は Garuḍa に訊ねて言う。

*kiṃ nu te manasā dhyātam aśubhaṃ dharma-dūṣaṇam  
na hy ayaṃ bhavataḥ svalpo vyabhicāro bhaviṣyati* (7)

君は何か道に悖る不浄な事を心に描いたのであろう。蓋しこの様な事は少々な過ちで起るものではない。

Garuḍa は貞女誘惑を心に描いた事を告白し、彼女に赦しを乞う。彼女は事の次第を説明し、彼の乞いを容れ元通りに翼を生やしてやったと伝えられる。

*ninditāsmi tvayā vatsa na ca nindāṃ kṣamyāmy aham  
lokebhyaḥ sa paribhraśyed yo mām nindeta pāpa-kṛt  
(MBh.5.111.13)*

貴方は私を軽んじた。そして私は（この）軽蔑に耐えられない。私を軽んじる怪しからぬ男は、（芽出度き）世界<sup>63</sup>を喪失する。<sup>64</sup>

## (2-5) 貞女の涙

上に不当に辱められた貞女が怒って呪詛すれば、彼女はその対象を焼き殺すとなしている章句を見たが、同様に貞女の流す涙は、それが地に落ちれば火花と化すと言われる。概してインドに在って「悔し涙」は熱いと言われるが、<sup>65</sup> 貞女の涙はその中でも熱さ格別となる道理である。

<sup>63</sup> For the meaning of *loka*, cf. Gonda 1966.

<sup>64</sup> Cf. Dumézil II 318.

<sup>65</sup> Cf. Hara 1998.

有名な Kalmāṣapāda の物語にあって彼は森に交接中のバラモン夫妻を見、空腹のまま無惨にもその夫を食べた。それを見た妻は涙を流しつつ呪詛を発し、挙句の果てに彼女は彼の面前で燃え盛る焰の中に身を投じた。

*tasyāḥ krodhābhibhūtāyā yad aśru nyapatad bhuvi*  
*so 'gniḥ samabhavad diptas taṃ ca deśaṃ vyadipayat*  
 (MBh.1.173.15)

怒りに襲われた彼女の涙は地に落ちた。それは火となって燃え上がり、その場を焼いた。<sup>66</sup>

貞女 Sitā を涙させ、その結果自滅した Rāvaṇa を嘆く Maṇḍodari の言に次の様に言われる。

*pravādaḥ satyam evāyaṃ tvāṃ prati prāyaśo nṛpa*  
*pativratānāṃ nākasmāt patanty aśrūṇi bhū-tale*  
 (R.6.App.68.66-67=Bombay 6.111.66cd-67ab)

貞女の涙は理由なしには地に落ちないと言う諺が、恐らく貴方の場合本になってしまったのでしょうか。

## (2-6) 貞女の手

狼藉者が貞女を犯そうとしてその髪を掴んだ時、<sup>67</sup> 貞女の手は剣と化し、髪を切って彼を振り払う。Sitā の前身 Vedavati は Rāvaṇa より逃れ、犯される以前に入火自殺を遂げた。

*evam uktas tayā tatra vedavatyā niśācaraḥ*  
*mūrdhajeṣu tadā kanyāṃ karāgreṇa parāmrśat (26)*  
*tato vedavati kruddhā keśān hastena sācchinat*  
*asir bhūtvā karas tasyāḥ keśāṃś chinnāṃś tadākarot*

<sup>66</sup> Cf. Meyer 234.

<sup>67</sup> Cf. Hara 1986 76-77.

(R.7.17.27 Bombay)

Vedavati によって、斯く（拒絶の言を）言われた羅刹は、その時手先でこの乙女の髪を掴んだ。

怒った Vedavati は手で髪を切った。彼女の手は剣と化して髪を切断したのである。

(2-7) 蘇生

上の殺害とは裏腹に、貞女は死者を蘇らす事が可能であった。貞女は夫を死神の手から奪い、共々天界に赴くと言われる。

*vyāla-grāhī yathā vyālaṃ balād uddharate bilāt  
evam utkramya dūtebhyaḥ patiṃ svargaṃ vrajet sati  
yama-dūtāḥ palāyante tām ālokyā pati-vratām*

(Skanda Purāṇa, Brahmakhaṇḍa, Dharmāraṇya chapter 7.54-55)

恰も蛇使いが蛇を力ずくで穴から取り出す様に、貞女は夫を（死神の）使者達より取り上げて天に赴く。閻魔の使者達はこの貞女を見るや逃げ出す。<sup>68</sup>

(2-7-1) ここに貞女は貞操力により生殺与奪の権を有していた事となるが、蘇生の最も顕著な用例は有名な Sāvitṛī 姫物語に見える。但しそれは余りにも有名であるのでここでは言及せず、一つだけ他の用例を挙げるに留める。貞女 Anasūyā 物語において、彼女は夫奉仕の真実に賭けて、事切れたバラモンを蘇生させた。

*na viśādas tvayā bhadre kartavyaḥ paśya me balam  
pati-śuśrūṣayāvāptam tapasaḥ kiṃcireṇa te (80)  
yathā bhartr̥-samam nānyam apaśyaṃ puruṣam kvacit  
rūpataḥ śīlato buddhyā vān-mādhuryādi-bhūṣaṇaiḥ (81)*

<sup>68</sup> Cf. Kane 2.568. and IS.6329, Cf. also Leslie 294 notes 48 and 49.

*tena satyena vipro 'yaṃ vyādhi-muktaḥ punar yuvā  
prāpnotu jivitaṃ bhāryā-sahāyaḥ śaradāṃ śatam* (82)

*yathā bhartr-samaṃ nānyam ahaṃ paśyāmi daivatam  
tena satyena vipro 'yaṃ punar jivatu anāmayaḥ* (83)

*karmaṇā manasā vācā bhartur ārādhanam prati  
yathā mamodyamo nityaṃ tathāyaṃ jivatāṃ dvijaḥ* (MP.16.84)

お嘆きあるな、久しき夫への奉仕により私の得たるタパスの力を見た  
まえ。

容姿、品行、知性、言葉の優しさを初めとする諸々の美点で、私は夫  
に等しき男を見た事がない。

この真実に賭けて、これなるバラモンは病癒えて若返り、妻とともに  
更に百年生き永らえん事を。

私は夫に等しき神を見ない。この真実に賭け、これなるバラモンは生  
き返り、無病息災たれ。

私は身口意三業に亘り、夫崇拜に絶えず努めて来たれば、これなるバ  
ラモンは生き返れ。

## (2-8) その他の神通力

### (2-8-1) 透視力 (Clairvoyance)

上の MBh.11.16.1 に見た通り、貞女 (*pati-uratā*) は天眼 (*divya-  
cakṣus*) を有して、遠隔の出来事を目の当り透視する事が可能であった。  
有名な貞女物語 (*pativratopākhyāna*) において、来訪したバラモン苦行  
者 Kauśika は、卑しい身分の夫への奉仕をバラモン歓待に優先させた貞  
女にその不敬を怒るが、彼女は彼に返事して言う。

*asmim̐s tv atikrame brahman kṣantum arhasi me 'nagha  
pati-śuśrūṣayā dharmo yaḥ sa me rocate dvija* (28)

*daivateṣu api sarveṣu bhartā me daivataṃ param  
aviśeṣeṇa tasyāhaṃ kuryāṃ dharmam dvijottama* (29)

*śuśrūṣāyāḥ phalaṃ paśya patyur brāhmaṇa yādṛśam*

*balākā hi tvayā dagdhā roṣāt tad viditaṃ mama (MBh.3.197.30)*

バラモン様、この失礼をどうかお許し下さい。（夫への）恭順奉仕による功德こそ私にとって（一番）大事なのです。

一切の神々の中で、夫こそ私の最上の神。私は彼の功德にあやかりたい。

バラモン様、夫奉仕の功德がどの様なものであるかご覧下さい。貴方が怒って雌鶴を睨んで焼き殺した事を私はちゃんと知っています。<sup>69</sup>

### （2-8-2） 匿身術

逆に貞女は又汚らしい男から己が身を隠す事が出来た。Pauṣya の妻を見る事を得なかった Uttanka は Pauṣya にその理由を聞かされる。

*saṃprati bhavān ucchiṣṭaḥ / smara tāvat / na hi sā kṣatriyā  
ucchiṣṭenāśucinā vā śakyā draṣṭum / pati-vratātvād eṣā nāśucer  
darśanam upaiti (MBh.1.3.112)*

今や貴方は穢れている。考えてみろ。かの貴婦人は穢れて不浄な者には見えないのだ。貞女なればこそ、彼女は不浄な者の眼には入らない。<sup>70</sup>

既述の Sudarśana と Oghavatī の物語でも貞女を見る事は出来ないと言われる。

*na cāsti śaktis trailokye kasya cit puruṣottama  
pati-vratām imāṃ sādhuṃ tavodvikṣitum apy uta (MBh.13.2.80)*  
汝の（妻）、この気高き貞女を見（udvikṣ-）得る男は三界広しと雖も、誰一人なし。

### （2-8-3） 太陽不昇

<sup>69</sup> Cf. Leslie 308-309.

<sup>70</sup> Cf. Wilhelm 13ff.

貞女の神秘力行使の中で最も有名なものは Mārkaṇḍeya Purāṇa 16.14-90 に語られる Anasūyā の物語である。それによると、不運の苦行者 Aṇi Māṇḍavya<sup>71</sup> によって日の出と共に夫 Kauśika は絶命せんと呪われた彼の妻は、夫の命を護るためにその貞操の力によって太陽を9日間昇らしめなかったと言われる。困惑した神々は同じく貞女の誉れ高い Anasūyā に依頼して、辛うじて太陽を昇らす事が出来た。<sup>72</sup> この奇蹟を Rāmāyaṇa 2.109.12は Sitā が Atri の妻 Anasūyā に紹介される件で簡単に言及している。<sup>73</sup>

*daśa varṣāṇy anāvṛṣṭyā dagdhe loke nirantaram (9)*

*yayā mūla-phale sṛṣṭe jāhnavi ca pravartitā*

*ugreṇa tapasā yuktā niyamais cāpy alaṃkṛtā (10)*

*deva-kārya-nimittam ca yayā saṃtvaramāṇayā*

*daśa-rātram kṛtā rātriḥ seyaṃ māteva te 'nagha (R.2.109.12)*

十年間、旱魃により世界が全く枯渇した時、激しいタパスを具え、諸々の戒行に飾られた彼女は球根や果物を創造し、ガンジス川に水を湛えた。<sup>74</sup> この貴女にとって母の如き彼女は、神々の為に急ぎ十夜を一夜となした。

この Mārkaṇḍeya Purāṇa に物語られるものは長文に亘るので、その全訳を他日に期する。

#### (2-8-4) 太陽転落

酷熱の太陽の下、渇に悩んだ貞節な王妃 Rūpavatī は遂に倒れるが、その時怒りのままに彼女は太陽を睨んだ。睨まれた太陽は地に落ちる。<sup>75</sup> 夫

<sup>71</sup> For this sage, see Kantawala 1995 120-139 and Wezler.

<sup>72</sup> Cf. Mallison 29 note 4.

<sup>73</sup> Mātāṅga Jātaka (497)にも、苦行者の呪いを実現させないために、賤民 Caṇḍāla が太陽を上らしめなかった話がある (*sattamedivasesuriy-uggamanam nivāresi J.4.388.24.*)

<sup>74</sup> この旱魃時の奇蹟は Raghuvamśa 13.51にも言及される。

<sup>75</sup> Cf. Mallison 29 note 3.

王は地に落ちた太陽と会話して落下の因を訊ねる。太陽は事の経緯を物語り、王妃の徳を讃え、王に水器 (*jala-bhājana*: 79) と靴と日傘を与えた。王妃は水を飲んで意識を取り戻し、太陽に無畏 (*abhaya*: 92) を与えて天上に帰してやったと伝えられる。

*ity uktvā patitā devi vihvalā duḥkha-pīditā*  
*patantyā ca tayā sūryo dr̥ṣṭo vihvalayā tathā* (67)  
*yadṛcchayā patantyā tu sūryaḥ kopena vikṣitaḥ*  
*tato vivasvān bhagavān samtrasto gagane tadā* (68)  
*divaṃ muktvā mahā-tejāḥ patito dharāṇi-tale*  
 (Varāha Purāṇa 208.69ab)

(水を下さい) と (夫王) に告げて、王妃は疲れ果て、苦しんで倒れた。悩める彼女は倒れつつ太陽を見た。

偶々、怒りに倒れつつある彼女によって睨まれた太陽は、その時天空に在って恐れ戦き、光輝燦然たるまま天より地に落ちた。

#### (2-8-5) 天界震撼

女性の貞操力は又天界を震撼せしめたと神話は伝えている。悪魔 Bāṇa は天界を脅かし震撼せしめたので、神々は Śiva 神に助けを求め悪魔撃滅の方途を訊ねる。神は聖仙 Nārada を呼び、天界震撼の因が彼等悪魔の妻達の貞操力に在るから、須らく彼女達を心変わりさせ、その貞操力を喪失せしめるよう命ずる。

*tā bhartr-devatās tatra striyaś cāpsarasāṃ samāḥ*  
*tāsāṃ vai tejasā vipra bhramate tripuraṃ divi* (17)  
*tatra gatvā tu viprendra matim anyāṃ pracodaya*  
 (Matsya Purāṇa 187.18ab)

天女にも等しいその女達は夫を神と崇めている。彼女達の (貞操) 力により天上のこの都は震動するのだ。

そこへ行って汝は (彼女達の) 心を誘惑 (して墮落) せしめよ。

勅畏み Nārada は、女心を討たんと (*striṇām hṛdaya-nāśāya* 19) 悪魔の都に至り、首尾よく総ての悪魔の女達の心を翻えさす事に成功して (*evam tāsām mano hṛtvā sarvāsām tu pati-vrātāt* 51) 天上に帰った。貞操を喪失して彼女達は力 (*tejas*) を失ったと伝えられる (*pati-vratātvam utsrjya tāsām tejo gatam tataḥ* 52)<sup>76</sup>。

(2-8-6) 死神恐怖

死神 Yama の使者も貞女を恐れ、<sup>77</sup> 且つは彼女を尊敬する。貞女は又「死の扉を見る事なし」(*mṛtyu-dvāraṁ na paśyati*) と言われる。

*eka-dṛṣṭir eka-manā bhartur vacana-kāriṇi*  
*tasyā bibhimahe sarve ye tathānye tapodhana* (5)  
*devānām api sā sādhuḥ pūjyā parama-śobhanā*  
*bhartrā cābhihitā yāpi na pratyākhyāyini bhavet* (6)

視線一筋、心一筋、只管夫の言を為す女、彼女を我等は他の人々と同じように凡て怖れる。

夫に言われれば、曾ってそれに逆わらぬ、気高き貞女は神々にも尊敬される。

*eṣa mātā pitā bandhur eṣa me daivatam param*  
*evam śuśrūṣate yā tu sā mām vijayate sadā*  
*pati-vratā tu yā sādhuḥ tasyāś cāham kṛtāñjaliḥ* (9)  
*bhartāram anudhyāyanti bhartāram anugacchati*  
*(Varāha Purāṇa 207.10ab)*

「彼は母なり、父なり、親族なり、神なり」と(なして)(夫に)奉仕する女は、常に我に打克つ。

夫の事のみ思い、夫に就き従う貞淑なる貞女に余は合掌なす。

<sup>76</sup> Cf. Kantawala 1964 98-99 and 282, and O'Flaherty 184.

<sup>77</sup> Cf. Mallison 29 note 2 and Leslie 294.



(2-8-7) 火も又涼し

(2-8-7-1) 有名な貞女 Sitā の神明裁判に於いて、<sup>78</sup> 彼女は燃え盛る火の中に入っても焼かれる事なく、火神は姿を現じて彼女の潔白を証した。その関連部分を邦訳すれば以下の通りである。入火に先立って彼女は火神に懇請する。

*yathā me hrdayaṃ nityaṃ nāpasarpati rāghavāt*

*tathā lokasya sākṣi me sarvataḥ pātu pāvakaḥ (R.6.104.24)*

我が心は常に（夫）Rāma より離れ行く事なければ、世の目撃証人たる火（神）は我を一切より救い給え。<sup>79</sup>

火神は彼女を膝に抱いて姿を現し、彼女を夫 Rāma に引き渡す。

*abravīc ca tadā rāmaṃ sākṣi lokasya pāvakaḥ*

*eṣā te rāma vaidehī pāpam asyā na vidyate (R.6.106.4)*

その時、世の目撃証人たる火（神）は Rāma に言って曰く。これなるは Sitā、彼女に如何なる罪とてなし。

(2-8-7-2) 羅刹王 Rāvaṇa が Hanumat の尾に火をつけて市内を連れ回した時、それを耳にした Sitā は只管火神に念じて次の様に言う。

*yady asti pati-śuśrūṣā yady asti caritaṃ tapaḥ*

*yadi cāsti eka-patnītvam śīto bhava hanūmataḥ (R.5.51.24)*

若し私に夫への恭順（の徳）あれば、又タパスあれば、将又私が忠実なる妻であれば、（火神よ）Hanumatに對し冷たくあれかし。

<sup>78</sup> Cf. Meyer 525.

<sup>79</sup> Cf. Lariviere 35 and 128: *atha vā śuddha-bhāveṣu śīto bhava hutāśana* (Divyatattva 201cd).

果たして火神はその尾を焼く事がなかったと言われる (*pradipto 'gnir  
ayam kasmān na mām dahati sarvataḥ* 29)。

#### (2-8-8) Chastity Index

婦人の貞操に宿る力の問題は、他の民族の物語、伝説にも共通して見出される Chastity Index の主題と連関する。<sup>80</sup> それは当然の事ながら又不貞の問題に連なっている。

(2-8-8-1) 昔、海の真中に Ratnakūṭa と名づける島があり、そこに Viṣṇu 教信者の Ratnādhīpa という王が住んでいた。彼は世界制覇の野望を起こし、世界中の王女を己が後宮に入れてやろうと一念発起、心に神を念じて苦行に専心した。その甲斐在って一夜、神は夢枕に立ち御宣託を賜った。「Kaliṅga の地に仙人の呪いを受けて白象と化している Gandharva あり、その名 Śvetaraśmi。前世の苦行、余への信心故に空中飛行、前世想起の力を有す。汝この象に乗り空中を往けば、諸王降伏して夫々汝に己が娘を提供せん。余はこの件を夢枕に立ち、象にも伝え置く」と。

果たして翌朝白象天を駆って現れ、それに乗るや忽ち世界制覇の夢叶い、8万の美女は次々にその後宮に入った。一日、王は常の如く象に乗って諸島を巡り都に帰還の途次、怪鳥に襲われて象は地に落ち再起不能となる。5日間食を得ず途方に暮れた王は神々を念ずるに、天上より声あり「唯一つ方途あり、貞女が象に手を触れなば即座に起き上がらん」と。王は歡喜して先ず王妃にそれを命ずるが、案に相違して王妃が象に手を触れても一向に効果なく、象は立ち上がらなかった。王は更に後宮の美女8万人に象を触れさせたが、尚象は起立せず、衆人監視の許に王宮に一人も貞女の無い事が露見して王は深く恥じ入った。最後に王は都の女を全員召集してこれを試みたが、更に効果がなかった。王の嘆く間に近隣の島から一人の女性が現れて象に触れ、忽ちそれを起立せしめたという。人民達はこれを見て言った。

<sup>80</sup> Cf. Tawney-Penzer I 165-168.

*imās tā viralāḥ kāś cid eveśvaropamāḥ*  
*sarga-pālana-saṃhāra-samarthā jagato 'sya yāḥ* (KSS.36.41)

自在神の如く、世の生住滅を自在になす貞女は蓋し稀なり。

不貞女の数多群がる中で、再起不能の象を起こす奇蹟を行じ得るのは貞女のみとなすこの物語は、ヘロドトスにみえるエジプト王ペロスの物語と比較されるが、<sup>81</sup> 何れも Chastity Index をその Motif としている。

貞女稀なりとなす嘆きは叙事詩に見られる。<sup>82</sup>

*sahasraikā yatā nāri prāpnotiḥa kadā cana*  
*tathā śata-sahasreṣu yadi kā cit pati-vratā* (MBh.13.20.65)

千人に一人、否十万人に一人、貞女あるや、なしや。

(2-8-8-2) より罪のない Chastity Index 物語は、単身赴任に出発せんとする商人 Guhasena と愛妻 Devasmitā の物語に伝えられる。商用にも拘らず妻の反対に遭った夫は悩み、両人はシヴァ神の神殿に神意を問わんと断食する。神は両人の夢枕に立ち給い、赤い蓮華を両人の手に授けて、「別離中、汝等両人の中の何れか一方その操を破れば、他方の手に持つ蓮華は萎む。さもなき限りは心配無用」と告げ給うた。両人は覚醒して互いの手に蓮華のあるに驚き、妻は安心して夫を送り出したという (KSS.13)。

#### (2-8-9) 動物との会話

Viṣṇu Purāṇa 3.18.52-94は、貞節な王妃 Śaivyā がその透視力により、

<sup>81</sup> Herodotus 2.111. それによると、その昔ナイル河が氾濫した時、王は河中に槍を投げ込んだ。この暴挙の故に彼は呪いを蒙り、10年の間失明した。11年目に神託あり。貞女の尿でその眼を洗えば開眼するという。王は王妃に依頼するもその眼は開かず、他の女性に試みても凡て不首尾に終わった。最後に一人の貞女現れて開眼したので、王は他の総ての女を Erythrebolus 市に集め、その市を焼き払い、この貞女と結婚したと伝えられる（松平千秋訳、「歴史」 岩波文庫、上. 227。

<sup>82</sup> Cf. Leslie 271.

夫王 Śatadhanu が生前異教徒と交わった罪で、順次犬、山犬、狼、禿鷹、烏、孔雀となって転生しているのを見、過去世を彼に想起させ、最後に再び結ばれる経緯を伝えている。そこには透視力、前世想起、動物との会話等の超能力が貞操の齎す所である事が物語られるが、これ又長文にわたるのでその全訳を他日に期する。

（本稿は平成13年度文部科学省科学研究費補助金〔基盤研究（B）（2）〕による研究成果の一部である）

## Abbreviations

- ABORI. · *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute* (Poona).
- IS. · O.Böhtlingk, *Indische Sprüche* (Osnabrück Reprint 1966).
- KSS. · *Kathāsaritsāgara of Somadevabhaṭṭa* (NSP.1930).
- JAOS. · *Journal of the American Oriental Society*.
- MBh. · *The Mahābhārata* (Poona Critical Edition).
- MP. · *The Mārkaṇḍeya Purāṇa* (Bibliotheca Indica 29, Osnabrück Reprint 1988).
- MS. · *Manusmṛti* (NSP 1946).
- NS. · *The Nāradaśmṛti*, ed., by R.W.Lariviere (Philadelphia 1989).
- NSP. · *Nirnaya Sagar Press* (Bombay).
- PS. · *The Pāśupata Sūtra* (Trivandrum Sanskrit Series 143).
- R. · *The Vālmiki Rāmāyaṇa* (Baroda Critical Edition).
- YS. · *Yājñavalkyaśmṛti* (NSP 1949).

## Secondary Literature

- Aklujkar : V.Aklujkar, "Sāvitṛī: Old and New", A.Sharma ed., *Essays in the Mahābhārata*, (Leiden 1991) pp.324-333.
- Bosch : L.P.van den Bosch, "The Marriage of the Dead in Ancient India, Rules and Remedies" in *Classical Indian Law*, ed by J.Leslie (Leiden 1991) pp.62-79.
- Dumézil : G.Dumézil, *Mythe et Épopée* II (Paris 1982).
- Gonda : J.Gonda, *Loka, World and Heaven in the Veda* (Amsterdam 1966).
- Hara 1977-8 : M.Hara, "tapasvinī", *Diamond Jubilee Volume of ABORI* (1977-8) pp.151-159.

- Hara 1980 : M.Hara, "Hindu Concepts of Teacher, Sanskrit *guru* and *ācārya*," *Festschrift D.H.H.Ingalls* (Dordrecht 1980) pp.93-118.
- Hara 1986 : M.Hara, "The Holding of the Hair (*keśa-grahaṇa*)", *Acta Orientalia* 47 (1986) pp.67-92.
- Hara 1997 : M.Hara, "The Losing of tapas", *India and Beyond, Essays in Honour of Fritz Staal* (London and New York 1997) pp.226-248.
- Hara 1998 : M.Hara, "Hot Tears and Cold Tears", *Purāṇa-Itihāsa-Vimarśaḥ, S.G.Kantawala Felicitation Volume* (Delhi 1998), pp.342-350.
- Hazra : R.C.Hazra, *Studies in the Purāṇic Records on Hindu Rites and Customs* (Dacca 1940).
- Hiltebeitel : A.Hiltebeitel, "Draupadī's hair", *Autour de la déesse hindoue*, *Puruṣārtha* 5 (1981) pp.179-214.
- Hopkins 1889 : E.W.Hopkins, "The Social and Military Position of the Ruling Caste in Ancient India", *JAOS* 13 1889 pp.57-376.
- Hopkins 1915 : E.W.Hopkins, *Epic Mythology* (Strassburg 1915).
- Hopkins 1932 : E.W.Hopkins, "The Oath in Hindu Epic Literature", *JAOS* 52 1932 pp.316-337.
- Kane : P.V.Kane, *History of Dharmaśāstra* 1-5, (Poona 1930-1962).
- Kantawala 1964 : S.G.Kantawala, *Cultural History from the Matsyapurāṇa* (Baroda 1964).
- Kantawala 1995 : S.G.Kantawala, "Legend of Aṇi-Māṇḍavya," *Legends in Purāṇas*, pp.120-139 (Delhi 1995).
- Lariviere : R.W.Lariviere, *The Divyatattva* (New Delhi

- 1981).
- Leslie : I. Julia Leslie, *The Perfect Wife* (Strīdharmapa-  
ddhati) (Penguin Books 1989).
- Lüders : H. Lüders, *Varuṇa*, I - II (Göttingen 1951-1959).
- Mallison : F. Mallison, *L'Épouse idéale, La Sati-Gītā de  
Muktānanda* (Paris 1973).
- Meyer : J. J. Meyer, *Sexual Life in Ancient India* (Delhi  
1971).
- O'Flaherty : W. D. O'Flaherty, *The Origin of Evil in Hindu  
Mythology* (Berkeley, Los Angeles, London  
1980).
- Smith : W. L. Smith, "Explaining the inexplicable: Uses  
of the curse in Rāma literature", *Kalyāṇa-  
mitrārāgaṇam, Essays in Honour of Nils  
Simonsson*, ed., by E. Kahrs (Oslo 1986) pp. 261-  
276.
- Tawney-Penzer : *The Ocean of Story* (Indian Reprint, Delhi 1968).
- Thieme : P. Thieme, "'Jungfrauengatte', Sanskrit kau-  
māraḥ patiḥ—Homer. kourīdios pōsis—Lat.  
maritus", *Kleine Schriften* pp. 426-513 (Wiesbaden  
1984).
- Wezler : A. Wezler, "The Story of Aṇī-Māṇḍavya as told  
in the Mahābhārata", *Beyond Orientalism*,  
ed., by E. Franco and K. Preisendanz pp. 533-555  
(Amsterdam 1997).
- Wilhelm : F. Wilhelm, *Prüfung und Initiation im Buche  
Pauṣya und in der Biographie des Nārōpa*  
(Wiesbaden 1965).
- Winternitz 1907 : M. Winternitz, *Geschichte der indischen Literatur*  
I (Leipzig 1907).

Winternitz : M.Winternitz, *Die Frau in den indischen Religionen*, I. Teil: Die Frau im Brahmanismus (Leipzig 1920).



## Summary

## Women in Ancient India, I

Minoru HARA

Problems of gender have been attracting the attention of scholars such as sociologists, historians, and anthropologists, but if we are expected to write about the same problems in ancient India, Sanskrit philologists have to resort to textual evidence.

Based upon such evidence as the Smṛti prescriptions of *asvātantrya* about women, the literary motif of sex-change, and the traditional custom of Suttee, people are often inclined to emphasise as a characteristic of Indian society the predominance of men over women. But we meet also counter-evidence such as the eulogy of the mother, the idea of the better-half, and stories of *pati-vratās*. Often the negative side is revealed in *stri-svabhāva* (the nature of condemned women) and the positive side in *stri-dharma* (women's duty as their ideal).

In a series of papers we are planning to elucidate these aspects, but here in this paper we shall collect passages relevant to chaste women (*pati-vratā*) and discuss the mystic power inherent in women's chastity.

## I Chastity

(1-1) Unconditional subjugation. (The husband should be respected by all means).

(1-1-1) The husband as god : *deva*, *daivata*, and *devatā*.

(1-1-2) The husband as *guru* : marriage as *upanayana*.

(Women are compared to pupils in initiation).

Women are also compared to Śūdras, whose duty is to serve their superiors.

(1-1-3) Women should sacrifice themselves to their husband as *deva* or *guru*.

(1-1-4) Women are always with their husband (*saha-dharma-cārīṇī*).

(1-2) Obedience (*pati-śuśrūṣā*).

(1-2-1) There is no way for women to accumulate religious merit except by serving their husband.

(1-2-2) Obedience to the husband is women's *tapas*.

(1-2-3) The husband's orders should be obeyed even if against morals.

(1-2-4) Heaven is closed to unmarried women. (= Marriage is the way to purify them).

(1-3) Women's *tapas* (some counter-examples). (= Existence of female-ascetics).

## 2 The Miraculous Powers of Chastity

(2-1) Chastity protects women in danger (*sati-tejas*).

(2-2) The curse (*śāpa*) as a weapon against offenders. (Examples of Damayantī and other chaste women).

(2-3) The curse (*śāpa*) as a weapon against unfair warriors. (Gāndhārī's curse against Kṛṣṇa).

(2-4) The punishment of offenders. (Śaṇḍilī deprives Garuḍa of his wings).

(2-5) The tears of chaste women (turned into sparks if they touched the ground).

(2-6) The hand of chaste women (turned into a sword).

(2-7) Chastity enables the dead to revive.

(2-8) Others:

(2-8-1) Clairvoyance.

(2-8-2) Invisibility (they are invisible to evil-minded men).

(2-8-3) The sun does not rise.

(2-8-4) The sun falls down upon the earth.

(2-8-5) Heaven shakes because of the power of chaste women.

(2-8-6) The god of death (Yama) and his followers are afraid of them.

(2-8-7) Fire (*agni*) becomes cool and never burns the chaste woman (fire-ordeal).

(2-8-8) The motifs of chastity-index.

Professor,  
International College  
for Advanced Buddhist Studies